

『桐園詠草附録』

— 明治期旧派歌人の歌書 —

はじめに

『桐園詠草附録』は『桐園詠草』の刊行にあわせて出版されたもので「新刊歌書広告」（活版一枚刷・管蔵）によると「これは詠草中の歌にて有職、故実、歴史、古歌、古文書、等によりて詠せられたる作は其根拠を知らざる時は意味を解する事かたければ門人等の質問より指示せられたる引書四十三部の古典籍を渉獵して要ある歌及各種の文章を採録し 何十丁オ 何行 と一々記載して本書と照校する時は明瞭に作業をする事を得べし翁の歌体は萬葉及八代集中の優美高尚なる姿を専として詠ぜられたれば彼新派の野鄙俗調の類にあらず幸に一読を給はらば幸甚ならむ（中略）彈舜平嗣子 彈愛子」とあり、歌集に注・註解などをまとめ一書として出版したものである。

『桐園詠草』については、拙稿「彈琴緒歌集『桐園歌集』三点について」（『武庫川国文』七十四号・平成二十二年十一月十日刊）で、刊本『桐園詠草』明治四十年刊行された彈琴緒六十賀の歌集として「青年時代より五十九歳迄の詠歌数千首の内より一節ある歌五百六十九首」を精選したもののというが、彈琴緒を取り巻く歌壇の趨勢は

管 宗 次

与謝野晶子が『みだれ髪』を発売して物議を醸した頃とは様変わりしており、国学者を宗匠とする社中、旧武家華族・公家華族の人々を中心とした御歌所の歌人が詠む和歌歌風と決別した「新派」の若い人々の歌風が既に新時代の文芸誌の中心とも考えられ、歌人の数も徐々に増えて、逆に「新派」から伝統的和歌に対しての「旧派」という呼ばれ方も明治末年・大正初期頃には刊行物に散見される。

幕末から和歌を学んだ彈琴緒の晩年は、「旧派」と聊か軽んじたかのような新時代の冷やかな評価に晒されながらも、湯茶・立花・謡曲のように伝統的作法心得として富裕な旧家の家族に、然るべき敬意をもって、受け入れがなされ続けたということは、穩健な上流の家庭に望まれた歌風歌体こそが「旧派」と呼ばれた人々の真の価値であつたからである。伝統的歌風は上流家庭の教養身嗜みの基本として和歌が、近代的な生活ななかにもあつたということ、近代と近世との連続性についても一考すべき点があるのではない。

また、近世期いわゆる幕末までは、日本は三都また四都と都市機能にそれぞれ独自性が持たされ、各藩の城下町には大名がいて小さな頂点が持たされていたわけだが、明治になると大名は武家華族、

京都の公家は公家華族となつて東京に呼び集められて、参勤交代のように御国許に戻ることはなく、文化も文化サークルもすべて東京に一極集中の中央集権国家の近代化のなかで、上方の文化基盤が瘦せ細つていったのも当然である。ただ大阪は大名が置かれなかったが、経済行政も東京に移つたため、多くの豪商は姿を消した。幕末期大阪の地下歌壇の中心的存在であつた有賀長隣は適塾の蘭方医緒方洪庵と和歌を通じて親しく交流があり除痘館の運営には、尽力し、有賀長雄をはじめ有賀の子供たちには種痘を受けさせている。

その有賀長隣も新時代の流れを見て取り、子供たちに新時代の教育を受けさせるためもあり東京に住居を移している。住居の自由が始まり、東京に対して地方となつた故郷を捨て、東京で新時代の官学で教育を受けるという形は、津和野の典医森家（森岡外）をあげると典型であるが、兵庫出石藩典医百瀬家も、そうした家で夏目漱石の主治医であつた百瀬家は幕末期の緒方洪庵著述と折衷医華岡流医書の膨大な蔵書があつた。それらの蔵書は一家を挙げての上京の際に、出石の親類縁者に託されたのだつた（縁戚の砂治寿一氏の御教示による）。

泉鏡花は、一族の人々の流転を重ねているのであろうか、御一新後に辛酸を舐めた加賀宝生の能楽師を髣髴させる人物が小説『歌行燈』に登場する。時代の変革期に旧時代の宗匠先生は行き場を失うか、思い切つた進展を謀るか、和歌宗匠の弾琴緒の場合、嗣子の男子夭折が続き、娘（愛子）に婿をとり、大阪の船場の上流夫人令嬢の宗匠として和歌に書も教授するという家塾運営で大昭和初期に至るまで活動は続けた。本稿であげる『桐園詠草附録』が発行された明治四十年は、明治二十七年の日清戦争、明治三十七年の日露戦争

争という日本の近代化の大きな出来事を経て、心情と文化に変化を日本人は皆受けた後である。旧派歌人とはばれる人々の、幕末幕府瓦解の頃から商都大阪に和歌社中運営を続けた実態も窺いたい。

一、刊本『桐園詠草』所収の和歌

弾琴緒の歌集が、刊本として上梓されるまでには様々な弾琴緒歌集が自編で編まれており、それらについては拙稿にまとめたが（『弾琴緒歌集』『桐園歌集』三点について）『武庫川国文』七十四号、平成二十二年十一月十日刊）、奥付刊記の無い刊本『桐園詠草』は『桐園詠草付録』と合わせて上梓されたために、『桐園詠草』には奥付刊記は無いのであろうが、表紙装丁の異なるものが多く、それぞれ別本扱いのところもあり、混乱している場合がある。

ここで、『桐園詠草』『桐園詠草附録』は合わせての出版物であることを明記したことで、『桐園詠草附録』の歌書としての性格は自ずと明らかになつたわけだが、まず『桐園詠草』について触れていきたい。

『桐園詠草』は、『弾琴緒家集・桐園詠草一冊 父翁の青年時代より五十九歳迄の詠歌数千首の内より一節ある歌五百六十九首を精撰して今回六十賀をする為に出版す』（『新刊歌書広告』（活版一枚刷・管蔵））といい、巻末には先述したように刊記がない。男子の夭逝した弾家の継嗣娘の弾愛子が学統を継ぐ人物として、跋文を書いており、跋文『桐園詠草附録』には「よに名たかき大人たちの序文など」を添えることを止めているのは「こは詠草にして。家の集とは異なりとて（弾琴緒が）ゆるし給はねは。さてやみぬ」という。

『桐園詠草』に載る和歌を拾つてみよう。所収の和歌に○印が頭に付けられたものがあるが、彈琴緒の自筆書き入れによると宮脇義臣の点であるという。宮脇義臣は兵庫県姫路市立城南小学校歌の作詞をするなど歌人として知られた存在で、いわゆる御歌所派歌人、旧派歌人の有力者の一人であつた。『桐園詠草』から部立とともに、数首ずつあげてみたい。

春部

社頭立春

たきすてしうけらの煙うちかすみ八坂のみや居はるたちにけり

浦立春

和布刈せししほ路やいつこ春たてははやくもかすみ早輶のうら

月の瀬の梅見にゆきしをり嵩の渡りにて

梅か香もおほろにかすみ月の瀬のゆふ川つたひふなあそひせむ

芳野の花見にゆきける時延元帝の御陵のもとに

ぬかつきて

さくらちる御垣のもとと苦ふめは春もつゆけしみよし野のやま

綱島なる藤田氏より牡丹の花を送られければ

君か園にさきてにほへるふかみ草おくるは富のあまりなるらむ

夏部

首夏藤

あすか川なつのあさせにうつるなりきのふの春のふちなみの花

御睡

ふみ見つゝひるねせしかな唐人のいさめしことも今はわすれて

夏車

門すくる卯の花くるまややまてほとゝきすきく道しるへせむ

秋部

水迎菰

秋はきのいろになかるゝやり水におもかけ浮ふ野路のたまかは

八月十四日今宮なる遊松園にて歌のまゝとるしけるをり

暮ぬまに月は木の間にに出にけりまつといふ名もいたつらにして

久しう病にわつらひけるとしの八月十五夜に

いたつらにねてあかす身となりぬれは心なしとや月もおもはむ

冬部

初冬

山畑のあからたちはなからみて色つくみれはふゆは来にけり

山冬月

まささちるあらしの上にに出にけりかつらき山のふゆの夜のつき

市中雪

ひむかしの市の植木も枝たれてをれむはかりにつもるゆきかな

恋部

聞恋

音にのみきくのした露わりなくもたおらぬ袖になにかゝるらん

たゝけとあけす

たゝけとも戸さしかためて我中になこそ関をたれかすえけん

寄貝恋

わた中のいくりにつける蠣からのからくも人にあひ見つるかな

雑部

うちわたす雲井はるかにたつ虹や神代にありしあめのうきはし

本居豊頼と共に三月の末つ方布引の瀧に物して

水上はふゆにやあるらむしら雪のまなくみたる、ぬのひきの瀧

須磨の八景の歌よみける中に上野落鴈

鴈たにもあはれとこゝをすきかねて須磨の上野の月になくなり

紫野の大徳寺の玉林院なる蓑庵といへる茶室を

世をそむくみのかくれかと釜の湯のわきて静けき庵はしめけむ

春宮に奉らむとて。浪速の花房といへる人の菊の

造花を三十種ほど巧みに物したるは。目もか、や

くはかりにいとつくし。かくて短冊を枝にゆひ

附む料にと。一種ことに銘をつけて。歌こひければ

篝火といふことを

ひをへてもうつろふへしやあしろ木のか、り火ならぬ花の光は

松浦詮朝臣のもとより。庭新樹の歌よめ。とありし

かは。よみておくりしに。東京の名高き人々に見せ

て。競点とせられけるに。其歌秀逸なりきとて。種

種のものおぐられければ。よろこひいひやるとて

たちそははとり拾ふへき実もなきをおもひの外に花さきにけり

秋山光條かもとより。秋草集の料のあまた取集

めて。おこせければ

あき山のもみちのいろしましらすは千種の花もはえなからまし

かへし

光 條

八千草のはなにましろもつ、ましやまた初しほの山のもみち葉

本居宣長翁の自画賛に須磨の浦のかたかける幅

の箱のうらに。安井朗安か歌こひければ

たまくしけ二見の浦にあらねとも此うつし絵もあけてこそみれ

ある人源氏物語の講義を聞なからおこたりかち
なりければ

桐つほのきりの一葉もちらぬまにはやくもふくか秋のはつかせ

楠原志朗か内謡百番と新十番の人物をよみて

みせければ其おくに書つく

も、草にましろ木賊のふしよくもうたひかへたるこれの言の葉

能楽をみてよめる歌の中に鉢木

情しるやとのつま木のなかりせはいかて花さくみとはなるへき

吉田好信か故郷にかへるをり

神無月しぐれのあめのふるさとに紅葉のにしき着てかへらなむ

大勲位山階宮晃親王の身まかり給ひし追悼会に

春月幽といふことを

はかなさを空にもみせてかけろふのあるかなきかに霞む月かな

西田豊秋かをさな子をおきてみまかりければ

ち、とのみ雛の雲雀の音になきて雲かくれにしひとしたふらん

尾高高雅みまかりけるよしき、て秋草集をおくる

とて

摘とりてみせむとおもひし秋草のはなは手向となりにけるかな

佐々木春夫か身まかりける冬

みわすゑていのりしかひもなき沢の森の木ノ葉とちりし君はも

中村良顕のみまかりける時

敷島のみちの外ゆくひとならはかはかりきみを惜しまさらし

加納諸平の三十年祭に被書懐古といふことを

わけ入りし熊野のおく山ふみに高きこゝろのあとをみるかな

堀秀成か一年祭に対月思故人といふことを

月みつ、おもひいつれは天津雁おとつれし世そさらにこひしき

おのか奥城処を天王寺の夕日岡なる淨春寺の境内に
定めて建たる石碑にかねてありつけさせたる歌

かきろひの夕日の岡のいはか根をまくらにまきて千代の眠らむ

明治二十三年憲法発布のをり八十歳以上のの人々に養

老金を恵ませたまふとうけたはりて

老ふれはかゝる恵みもありときくうらやましきはよはひ也けり

佐々木弘綱か六十賀に寄歌祝

ふみの名の千船につめるしら玉を君かよはひのかすによまはや

おのか五十賀に寄琴祝といふ歌を国々より集めて

年ほきにうたふもうれし琴の名のつくしあつめて人のことの葉

詠史部

日本武尊

渡津海の浪のあらひにくらふれは火中にたちしうきはものかは

紫式部

をみなへしなまめく世にも藤はかまひとり気高き香に匂ひけむ

楠公

おほ君のゆめにみえずは埋れ木となりなむものを楠のひとと

新題部

宮城築造

あたらしくたくみつかさかつき建し大宮はしらあにくちめやは

公園

花紅葉こゝろのまゝにめつる哉わか身ひとりの園にはあらねと

市街燈

暮ゆけはとす火影のかすそひてちまたは星のはやしなりけり

電氣燈

いなつまをはかなき物とおもひしはかゝる光をみぬ世なりけり

岐阜提灯 一名御殿提灯

細殿のひさしにかくるともし火に御苑のほかのはなをみるかな

俳諧歌部

橋上月

二見かた磯のいはほにひくしめの下よりいつるなみの上のつき

髭

しけりあひていふせくなりぬいてけふは花の下草荳やはらはむ

寄歌述懐

いつよりか実なきこと葉の種をうゑて歌のあらず田作り初けむ

それぞれ伝統的な部立により選ばれた歌五百六十九首が整然と載せられているわけだが、『雑部』に挨拶の和歌が多くあり、交流交際に旧派歌人の重鎮がずらりとならぶ。『類題千船集』の編集出版にあたっていた佐々木弘綱に賀の和歌を送ったり（ちなみに『桐園詠草附録』には「伊勢国石薬師の。佐々木弘綱が。類題千船集初編より三編迄編輯す」と記している）尾高高雅の弔いに自分の編集した『秋草集』に歌を添えて送ったり、旧派歌人に『類題鴨川集』や『類題鮎玉集』に最盛期を迎えてから撰者歌人の歌壇でとらえかたにひとつのバターンが明治になっても変わらずに続いていたことがはつきりわかる。地方文人との類題歌集投稿を通じてのネットワークは、飛脚便が元々整っていたが郵便の近代整備のさらなる充実は新聞の普及にも力を添え、弾琴緒は伊丹という商業先進地域の役人をしていたためあつて時代の動向流れをつかむにも、機を見る

に敏なるものがあつたといえよう、近代的流通システムを和歌集出版に活用したことが桐園運営の成功の鍵であつたといえよう。彈琴緒の和歌の師、中村良顕が加納諸平の門人という鈴屋の学統本流であつたため、伊丹の中村良顕を要として関西における鈴屋に席を置く者としての立場を堅持するがごとくに、加納諸平年祭が「加納諸平の三十年祭に被書懷古といふことを」に続き「おなしく四十祭に夏草といふことを」「おなしく五十祭に寄筆懷旧」と歌題に続くのも当然といえよう。

和装活字本に組み出版したため、幼稚な製版技術な明治十年代『類題秋草終』は明治十四年刊行、『民法戸籍類纂』『郡区吏必携初編』『租税規則全書』『日本酒釀法』などの法律法令関係の本六十八部七十一冊を明治十一年から二十年頃まで出版している）には、誤字誤植にはじまって混乱の時代を経て、明治四十年の発刊物『桐園詠草』は非常に版面も美しい。和歌を一行一首に収めるのに一行二十八字、半丁十行、詞書や題にも一行から数行取るので半丁に六首から四首ほど（詞書が長く二首というところもある）が中本一冊にコンパクトにまとめられている。

和歌の歌風は平易なだらか穩健にして高雅、また均整の取れた音読朗詠に向いた柔らかなものである。伊丹や大阪の穏やかな富裕な階層に落ち着いた人格の涵養に学ばれた和歌とはどのようなものであつたかの、典型を垣間見る思いがする。朝日新聞（明治四十三年七月三十一日）『○桐園詠草 ○桐園詠草附録』広告に

この翁の歌は極めて平穩にして時流の如く新奇なる口つきを喜ばず一首の中只疵なからむことを勉めたるらし宗匠たる人はこの心肝要なり世のかいなでの宗匠は自分合点の典故を使ひて

歌に拙きをこまかし又勝手氣儘に詠出で、世人の推敲を受くるなどは人に師として行進を導き難きにあらずや初学の人この翁の集より進まば邪路に趨る患はなかるべし

という。教養人の品格形成保持に和歌があらゆる趣味学問の基礎とされたればこそ和歌宗匠は社交の場の中心的人物として欠くべからざる存在として必要であつた。

二、『桐園詠草附録』の編集

『桐園詠草附録』^{（注8）}は、題名書名がいうように「附録」というべきものであるが、『桐園詠草』と同時に発刊されたものであることは先述したが、「門人聞書」となっており、歌人による自作和歌に注を施したものとしては会津八一の『自注 鹿鳴集』（岩波文庫）が名高いが、旧派歌人の歌集に注を施したものが一冊の書冊となるというのは、やはりかなり珍しい。『桐園詠草附録』の巻頭の「桐園詠草附録のゆゑよし」をみると同書がアイデアマンであつた彈琴緒の企画のおもしろさに気付く。

桐園詠草附録のゆゑよし

一師翁のわかきほとより詠せられし歌とをも。桐園詠草と名つけられたるは。前裁に大きな桐の木のある故なりとぞ。こたひ摺巻に物せらるゝにつきて。貴顕かたの題字。よに名たかき大人たちの序文などを乞求めて。錦の上に花をそへむことをすゝめまいらせれと。翁のいはるゝに。かゝることは今の世のならはしにして。誰もかれも者すめれと。こは詠草にして。家の集とは異なり

とてゆるし給はねは。さてやみぬ

一歌の頭に○印を付けたるは。有職、故実、歴史、古歌、古文章などによりてよまれたる歌にて。初学のわれらは。作意のさとりかたきも多かれは。つましるしをつけて質問せしに。そは何の書。こは彼ふみによりりなど。つはらに教へ給ひしかは。おのおのかきと、めつるにかく一とちの冊子とはなりぬ

一記紀萬葉の長歌短歌は。みな真名書なれとも。同じまなひのはらからには。初学の人たちも多ければ。仮名にあらためてかきつ一日記物語ふみによりてよまれたる歌は。要ある文のみ摘採して其意をしらしむ。猶くはしくは本書にゆつりぬ

一源氏物語の巻々をよまれたる歌。能楽を見て口すさひ給ひしもの詠史のうたともは。おの／＼其より所をしらされは。意を解すること難かるへし。かゝるところは。本書によりて事蹟の文を引用せり。しかれとも。漢文のまゝを採録せむには。初学の人たちの読かたからむと思はるれば。普通の文にうつして大意をしめす。されと。まなひ浅きわれらか物しつるなれは。誤謬もいとあらむかと。汗あゆるこゝちす。斯道の博士たちおほらかにゆるし給へかし

明治四十年六月

門人等しるす

『桐園詠草附録』は「門人聞書」としているが、これは当時の慣習、文飾、謙譲といった気風のなかで、「門人聞書」としているのに過ぎないのであって、弾琴緒の著述であらう。管蔵の一冊は、伊丹の門人であった旧家の旧蔵本である一冊を中尾松泉堂から購入したものであるが、弾琴緒自筆書き入れ本で刊本にさらなる書き加え

が膨大な量で見える。

三、『桐園詠草附録』にみえる註解

では、具体的に『桐園詠草附録』の「門人聞書」という注解をみていくこととする。

・一丁オ 五行 たきすてしうけらの煙

十二月晦日。京都祇園社にて。削掛の神事を執行せらるゝ時。うけらの火を。火縄に。点して人々の請け帰り。元旦に雑煮をたきて。祝ふ事なり。委くは。都名所図絵に記せり。明治五年迄は。太陰暦の晦日なりしを。今は太陽暦の十二月三十一日の夜に。執行するよしなり

「一丁オ 五行」は、『桐園詠草』一丁表五行目の和歌をさす、本稿では以下もそれにならない記す。「一丁オ 五行」の和歌は巻頭歌で、先に（一、『桐園詠草』所載和歌 あげた和歌である。

たきすてしうけらの煙うちかすみ八坂のみや居はるたちにけり
という和歌であるが、新暦が太陰暦から太陽暦への切り替えは、まさに文明開化であり、季節の諷詠が題とも関わつて一大関心事であった俳諧の俳人は勿論のこと、歌人にも大切なことであった。ここでは『都名所図絵』を引いているが、引用書の一覧もあつて古典に交じり時事の書籍もあがつている。

・二丁オ 七行 住の江のおとひ少女に

萬葉集一。「あられうつあら、松原住の江のおとひをと女と
みれとあかぬかも」

若菜

住の江のおとひ少女になつさひて遠さと小野のわか菜つみてむ

(以下、『桐園詠草附録』をあげたあと該当する和歌を、『桐園詠草』
よりあげる。)

・六丁ウ 一行 おきいてむ心もゆるふ

源氏末摘花の巻「頭中将おはして。こよなき御朝いかな。故
あらむかし。とこそ思ひ給へらるれと。といへは。おきあが
り給ひて。心やすき独寝の床にて。ゆるひにけり云々

朝春雨

おきいてむこ、もゆるふ春雨にねふるともなく朝いせしかな

・十三丁オ 七行 あすか川なつの浅瀬に

古今集雑下。「世に中は何か常なる飛鳥川きのふの淵そ今日
は瀬となる

首夏藤

あすか川なつのあさせにうつるなりきのふの春のふちなみの花

・二十九丁ウ 三行 まささちるあらしの上に

新古今集冬。「うつりゆく雲にあらしの声すなりちるか正木

のかつらきの山

山冬月

まささちるあらしに上に出にけりかつらき山の冬の夜のつき

・四十五丁オ 七行 山吹は言ぬ色かと

同(源氏物語)末摘花巻。「年ころ思ひわたれるさまなど。
いとよくの給ひつ、くれど。ましてちかき御いらへは絶てな
し」又「浅ましう高うのひらかに。さきの方すこししたりて。
色づきたる事ことの外にうたてあり。」此姫君は。源氏に逢
ても。一言も物いはさるを。山吹は口なし色なれば。二句い
はぬいろといへるなり。又容顔の事をいへる所に鼻のさき赤
き色なる故に。下句くれなゐにして。といへるなりとそ

『桐園詠草附録』は古典注釈書ではないし、引用出典としてあが
る古典文学もごく知られたものばかりであり、銜学的な学風を嫌う
大阪らしい平穩な詠みぶりである。ここで『桐園詠草附録』の巻頭
にあがる引用書の計四十三部をあげる。

古事記 日本紀 国史略 日本外史 常陸風土記 延喜式

公事根元 禁秘御抄 衣服令 源氏装束抄 萬葉集 萬葉考

古今集 後撰集 拾遺集 後拾遺集 金葉集 千載集 新古今集

新勅撰集 玉葉集 新統古今集 催馬楽 百人一首一夕話

柿園詠草 類題千船集 土佐日記 伊勢物語 源氏物語 枕草紙

徒然草 月瀬記行 陸路記 群書類從 都名所図絵

和布菫神社誌 丹波国鐘ヶ坂隧道概記 内外謡本 日清海陸戦史

尾崎雅嘉著『百人一首一夕話』は明治期に非常によく読まれており、百人一首の注釈書というより、逸話集や歌人伝記集として読まれていることがわかるが、谷崎潤一郎が小説『少将滋幹の母』（初出・昭和二十四年十二月～二十五年三月『毎日新聞』）のなかで用いた物語の世界に読者を取り込む装置として『百人一首一夕話』の一節を引いているのも、幕末明治期に史談読本に近い扱いで読書人に読み継がれていたことがわかることである。

『桐園詠草附録』に引用書を見ると、時事問題を詠じた和歌には、後に歌集としてまとめるのに、やはり註解が必要となるのは当然ながら、明治という時代を生きた近代人、旧派歌人はどのような時事に対してどういった感想感慨をもったのか、興味が尽きない。樋口一葉が日清戦争に対して様々な和歌を詠み、丁汝昌が北洋艦隊敗北に責任をとり自決したことには深く感銘同情の和歌を詠んでいる。では、弾琴緒は、韓国の政情や日露戦争などの時事を時代のなかでいかに見ていたのだろうか。

四、むすび 時事和歌にみる弾琴緒

『桐園詠草』の部立は伝統的な部立のあとに、「新題部」という部があり、「宮城築造」「聖蹟保存」「韓国政府改革」「日清戦争の時李鴻章の来りて和を乞ひければ」「京都の大極殿をみて」「公園」「丹波国氷上郡の鐘坂の隧道を」「市街燈」「岐阜提灯 一名御殿提灯」「日露戦争の歌よみける中に地雷火」「婦人洋装」「球突場」「生徒運動会」と歌数は少ないが（五六九首中十三首）、花鳥諷詠とは異なる

る世俗の人事に部立が設けられたのはおもしろい。東京の旧派歌人歌集にも新題の部立はよく設けられているが、いち早く活版印刷による歌集の出版を引き受けて、「桐園吟社」「桐園出版社」といった事業を起こし「応需印刷製本調整」業務によって事業利益を産んで、社中を続けた手腕は時代をよむ確かさがあつたからであろう。

弾琴緒は、もとは行政にあたる明治初期の役人という立場ながら、元は二束の草鞋を履き、経済優先という上方商人の家に育つて世事の俗事から政治経済までの情報に通じていたのは、当然といえば当然であつたかも知れない。和歌という韻事風流に、経営を持ち込んだ弾琴緒は「新題部」に、次のような和歌を詠み、注を施している。

・五十七丁オ 五行 からす羽にかく文字

明治三十一年十一月十六日。陸軍大演習にて。大阪府に行幸あらせられ。和泉の国大津附近の戦争を。黒鳥山に野立して。観覧あらせられし記念として。其蹟に玉垣を遶らし。碑を建たり。烏羽に文字かく事は。昔高麗国より。日本人の智を試みむ為め。烏の羽に文字を書いて。おこせしに。ある人これを蒸て。紙にうつしとれば。文字の形あらはれたりとぞ。金葉集、我恋は烏羽にかく言の葉のうつさぬほとはしる人もなし。日本紀寛宴歌に「世の中に君なかりせはからす羽にかけの詞はなほきえなまし」。敏達天皇の巻に見ゆ

聖蹟保存

からす羽にかく文字ならてくるとりの山も行幸の跡と、めけり

・五十七丁オ 七行 日の本の国の光に

朝鮮国は。我帝国より独立国として。世界各国に。紹介したるを。清国は猶属邦と称して。彼是干渉する所あるにより。明治二十七年五月頃より。日清交渉起り一時属邦の意味を削除せしより。大島公使は。内治庶政改革の各条綱目草案を出し。韓廷に於て実行せしむる事となりぬ○往昔より。朝鮮国を鶏林と称す

韓国政府改革

日の本の国のひかりに闇夜なすかけのはやしもや、しらみけり

・五十七丁オ 九行 から綾を大和錦に

二十七年八月。宣戦の詔勅を發布し。日清戦争起るに。皇軍連戦連捷して。遼東半島はいふも更なり。威海衛をも攻落す。清国政府は恐怖して。同年十一月。外国人某を以て講和を乞へとも拒絶す。二十八年一月高官の使節二人を派遣して。恭順の意を表し。又講和を乞ふに猶排斥す。同年三月。直隸総督李鴻章を使節として来らしむ。因て馬関にて談判を開始し。四月十七日彼我の調印を終り。平和克復す。作意は唐綾と大和錦と比較して。唐綾の方品下りたりといふ。四句に。支那降の意を含む。なりとぞ

日清戦争の時李鴻章の来りて和を乞ひければ

からあやを大和錦にくらふればはしなくたりてもみゆるいろかな

・五十七丁ウ 一行 とひに尾のきら／＼しくも

明治二十八年。京都府にて。第四回内国勸業博覧会を開設する時。平安時代の古式により。岡崎の地に。大極殿を模造建築し。平安神宮と称して。桓武天皇を祭る。殿舎は碧瓦朱棧にして。棟には金色の鶏の尾を着く。

京都の大極殿をみて

とひの尾のきら／＼しくもみゆるかな碧のかはら朱のたかとの

・五十七丁ウ 五行 七曲の玉よりかたき

丹波国氷上郡と。多紀郡の境界にある。鐘が坂は。道路峻険にして。車馬通ぜず。因て開通の便を計らむ為め。明治十三年十二月より開鑿に着手し。隧道を造るに同十六年十月に竣功し。開通式を行ふと云。○七曲玉は。昔唐土国より。我國の人の智を試むとて。七曲の玉に緒を貫けといふ。何かしの中将。一正の蟻をとらへて。腰に細き糸を着け。玉の両口に密をぬりて。彼蟻を入たるに。密の香をかぎて。左右の口に這ひ出し。故事なり

七わたに曲れる玉の緒をぬきて蟻通しとは我をしらすや

丹波国氷上郡の鐘坂の隧道を

な、わたの玉よりかたき山をさへつらぬきとほす君か御代かな

・五十八丁オ 三行 あら金の土の底にも

三十七八年日露戦争の時。敵は要塞防禦の爲め。地雷火。鉄

條網。鹿柴等を備ふ。

日露戦争の歌よみける中に地雷火

あら金のつちの底にもおもひきや裂いかつちのこもるへしとは

・五十八丁オ 五行 うるはしき桜かさねも

日本女官は。昔は十二重の服装にて。優美艷麗なりしに。近頃西洋式の服装する婦人の。追々増加するを見て。慨嘆して詠したるなり。二句桜かさねを我国に比し。から桃を外国に比するなりとぞ

婦人洋装

うるはしき桜かさねもから桃のはえなきいろにうつりゆく世か

・五十八丁オ 七行 つくまりのまろひてあたる

これは。西洋遊戯具にして。広き台の上に。紅白の玉をおき。又一个の玉を。棒にて突き当るなり。玉のカチ。カチ。と響く音によりて。勝負の知る、なりとぞ。カチの音に。勝を含む

球突場

つくまりのまろひてあたる響にもかちてふ事はしるしそ有ける

・五十八丁オ 九行 難波津を手習ふ子等か

古今集序に。難波津浅香山のふた歌は。父母のやうにて手習

ふ人の初にもしける」。とあるにより小学生徒に比す。下句は。運動会の列を揃へ歩行する事にて。足と声とをいひかけたるは。難波津の照応なり。とぞ

生徒運動会

難波津を手習ふ子等か一つらにねりゆくあしはみたれさりけり

『桐園詠草附録』の卷末をみると、「近世の類題歌集に撰入の歌数表 桐園詠草中の歌」というものがある。

近世の類題歌集に撰入の歌数表 桐園詠草中の歌

明治開化集 佐々木弘綱撰 二首

大八洲歌集 本居豊顕撰 四首

東海拾玉初編 井上喜文撰 十二首

同 二編 同撰 十二首

新英集 同撰 十六首

類題秋草集 彈琴緒撰 二十五首

千代田集初編 佐々木弘綱撰 二十八首

同 二編 同撰 十五首

同 三編 同信綱撰 七首

響洋集 砂川雄健撰 十八首

桑の若葉 拝郷蓮因撰 二首

内外詠史歌集 税所敦子撰 一首

稻名野摘草 中村良顕撰 十二首

明治佳調 木山清名撰 九首

甲斐嶺集 丸山道太郎選 三十二首

類題正叢集 島多豆夫撰 三十二首

京都邦光社歌集 自初輯至二十輯 二十首

垣内の摘草 中村良顕撰 合計百首

一輯二十三首二輯九首三輯十八首四輯十九首

五輯十三首六輯十三首七輯五首

總計三百四拾七首

猶其他年賀追悼歌集及諸々の雜誌に出たる歌は枚挙するに遑あらずときく

それらは旧派歌人宗匠による類題歌集に撰ばれた弾琴緒の和歌の数と所収歌集書名を誇らしく列記したもののだが、弾琴緒と社交交際、文雅を通じての交流があつた歌人たちの人名録ともいえるし、旧派歌人が題詠に懸命であり、題詠と月並歌会、題詠と類題歌集は切り離せないからこそ和装活版本にこだわりの、出版事業も続けられたといえそうである。本稿で取り上げた『桐園詠草附録』は『桐園詠草』の附録であり、弾琴緒が明治二十年代に出版しはじめた頃の歌集のように和装活版で変体仮名活字、洋紙ではなく和紙をつかう袋綴という装丁は明治四十年には、和装活版本は新鮮味をもつて迎えられた時代から、重鎮懷古翁の古雅な経費のかかる凝った装丁歌集の上梓と映つたであらう。また、時事を詠んだ和歌が注解の必要になって、時代の流れに弾琴緒も感慨を深くしたことであらう。

(付記) 本稿を成すにあたり、弾琴緒御子孫の彈泰平氏、彈昌子氏をはじめとする方々に御協力いただいたことを心より感謝申し上げます。

注

- 1 木村三太郎『浪華の歌人』(昭和十八年四月三十日刊、全国書房)
- 2 管宗次「彈琴緒―明治期旧派歌人による出版事業―」(『京大坂の文人 続々々』二〇一〇年二月六日刊、和泉書院)
- 3 管宗次「有賀長隣」(『関西黎明期の群像』平成十二年五月二十日刊、和泉書院)
- 4 (3) に同じ。
- 5 『続浪華摘英』(発行兼編集三島聰恵・大正五年十二月刊)
- 6 (1) 同じ。
- 7 管宗次「彈琴緒『再撰 類題秋草集 初編』について」(『武庫川女子大学生生活美学研究所』二〇号、二〇一〇年十一月十六日刊)
- 8 管宗次「彈琴緒歌集『桐園歌集』三点について」(『武庫川国文』七十四号、平成二十二年一月十一日刊、武庫川女子大学国文学会)

(すが・しゅうじ 本学教授)